

死をめぐる認識と教育への展望 (その1)

—短期大学看護学生の態度とその解析—

藤原 宰江・片山 信子・掛橋千賀子
池田 公子・出宮 一徳

I はじめに

看護者が、引き負わなければならない終末期ケアの課題は、近年とみに世間の注目を集めるようになった。病院における人の死の増大と癌など難治性疾患の増加は、このテーマをますます切実なものとしている。

ここ数年、看護婦養成施設の中で、老人看護学や Death Education を重視する傾向がみられるのはこうしたニーズを裏書きするものであり、本学でも1昨年からの具体的な形で教育課程の組み換えにふみ切った。しかし、有効な教育を組織するためには、なお相当の検討が必要である。

筆者らは先に、看護学生の終末期看護に対する援助認識ならびに援助行動傾向を、顕在性不安尺度(以下 MAS という)との関係で検討し、若干の指標を得たが¹⁾、本稿では更に標本数をふやして、学年別の相違もしくは発達の様相を解析した。対象としたカテゴリーは不安度、援助意志および個人的背景である。

これらの相関からは、学年別に有意差の認められないものが多かったが、死についての学習体験では学年間の差異が明らかとなった他、関係因子の中から主要な5つの成分を抽出するなど、今後の教育的配慮に有用な示唆を得ることができた。

看護学生を対象とした終末期看護にかかわる研究は、本邦では波多野らのものがあるが^{2~8)}、多変量解析を援用してその意味に触れたものはない。単純な平均値の差の検定では情報量の損失が多く、有意な結論を引き出せない恐れがあるので、本稿では分散分析、主成分分析、正準判別分析を加えてデータの解析を試みた。

その結果、学年間の差異や、Death Education のキーワードに相当すると考えられる主成分を明らかにしたので、その大要を報告する。

II 研究方法

1 調査対象と方法

昭和61年から62年にわたって、本学看護科学生289名を対象に調査を行った。1年次生については入学直後、2年次生は10月、3年次生は7月に実施した。調査は、特別な説明なしに調査表および MAS 検査表を一斉配布し、留置法とした。回収率は86.9%、うち199名の調査データを解析した。

2 調査内容と集計方法

1) 個人の死に対する不安得点

個人の死に対する不安得点は、Collett と Lester によって作成された死への不安尺度 (Collett-Lester Scale⁹⁾ [以下 CLS という]) を用いた。これは自己の死・他者の死・自己の瀕死・他者の瀕死の4つの範疇に収まる36の質問から成り、個人の死に対する不安の程度を知るために用いられる。

各質問毎に強肯定から強否定までの6段階の選択肢を設け、不安の強さに応じて6~1点を与え、各カテゴリーの合計点を算出し、個人の死に対する不安度を知るように設計されている。

2) 終末期患者と家族に対する援助意志

死が間近い患者およびその家族の看護に対する一般的态度を示す3項目(患者のそばにいたい・患者のことをしたい・家族の助けになりたい)について、「絶対避けたい」から「進んでほしい」までの4段階の選択肢を設け、各々に1~4点を与えて合計点を算出した。

3) 終末期看護を題材とする看護場面における援助認識と発言傾向および援助行動傾向

①死を予感し、精神的動揺を示す患者が、その反応として治療の継続に抵抗を示している場面、②身体的苦痛、体力の衰えの為に死への不安を感じている場面、③生命維持装置下で命をつないでいる患者をみとる家族の苦悩場面の3つについて、あなたは、④どう思う

か。㊸何と言うか。㊹どうするか。を自由記述で回答させ、MAS別にカード集計した。

4) 死に関する個人的背景

家族・友人などの死に関する個人的経験、自分の死を意識した経験、死にゆく患者の看護についての関心、学習体験、宗教の有無について回答させ「はい」に1点、「いいえ」に2点を配点し点数化した。

5) MASによる不安段階

MASは、個人が日常一般的な環境のもとで抱えている慢性的不安のうち、本人によって意識されるもの、すなわち個人の顕在的慢性不安の全体的水準を測定し、その不安の程度を知る目的で使用される。¹⁰⁾ MAS不安得点の平均値は、女子大学生の場合17.80、標準偏差7.58であり、27点以上をI、23～26点をII、14～22点をIII、10～13点をIV、9点以下をVの5段階に区分する。I段階は高度の不安を示すもの、II段階はかなり不安が高いもの、IIIは標準段階であり、III～Vを概ね正常域と見なす¹¹⁾。

3 解析

MAS段階、CLS得点、終末期看護に対する援助意志および被検者の個人的背景について相関係数を求めた他、分散分析、クラスター分析、主成分分析、正準判別分析を行った。使用コンピュータはPC9801VMで、

プログラムは田中らの方法¹²⁾を一部変更して用いた。なお本稿では、終末期を題材とする3つの看護場面における援助認識と発言傾向、援助行動傾向についての解析は割愛した。

III 対象の特性

1 死に対する個人的経験

表1は、死に対する個人的経験の調査結果である。全体では「死にゆく患者の看護についての関心」が89.9% (179人)で最も肯定率が高く、次いで「学習体験」の61.8% (123人)、「家族の死の経験」58.3% (116人)となっている。7項目中の最小は「臨終経験」の18.1% (21人)であったが、学年間では若干の相違がみられる。即ち、上位を示したものを学年別にみると、3年次生および2年次生では「死にゆく患者の看護についての関心」(90.1%、94.2%)と「学習体験」(88.5%、69.6%)が上位を占め、1年次生は「死にゆく患者の看護についての関心」(85.5%)、「家族の死の経験」(68.1%)が多かった。最下位は3年次生の「宗教」(8.2%)と、2年次生および1年次生の「臨終経験」(17.6%、14.9%)である。なお1年次生では、「学習体験」が3・2年次生の1/2以下となり、分散分析でも有意の差を示した。

表1 死に対する個人的経験

項目 学年	宗教			家族の死の経験			臨終経験			友人の死の経験			自分の死を意識した経験			死にゆく患者の看護についての関心			死についての学習体験					
	あ	な	無回答	あ	な	無回答	あ	な	無回答	あ	な	無回答	あ	な	無回答	あ	な	無回答	あ	な	無回答			
1 n=69	20 29	47 68.1	2 2.9	20 29	47 68.1	2 2.9	7 10.1	37 53.6	3 4.3	21 30.4	46 66.7	2 2.9	30 43.5	39 56.5	0	59 85.5	10 14.5	0	21 30.4	48 69.6	0			
2 n=69	12	54	3	34	49.3	35	6	28	0	14	20.3	53	2	32	46.4	37	0	65	94.2	4	48	69.6	3	
3 n=61	5	54	2	35	57.4	24	2	8	13.1	27	44.3	0	19	31.1	38	6.2	4	6.6	55	90.1	4	54	88.5	3
合計 n=199	37	155	7	116	58.3	81	2	21	10.6	92	46.2	3	54	27.1	137	68.8	8	4.0	179	89.9	18	123	61.8	6

学習体験ありの内詳

学年	学習体験方法		
	学校教育	マスコミ	家庭教育
1 n=21	20 95.2	10 47.6	3 14.3
2 n=48	47	1	4
3 n=54	51	11	4
合計 n=123	118	22	11

2 学年別 MAS構成比

図1は、MASによる学年別構成比を示したものである。学年間のMAS段階別平均値および標準偏差に有意差はなく(後述)、3学年とも正常域が3/4を占めた。なお2年次生と3年次生の構成比は近似しており、1年次生のそれとはやや異なる。

3 CLSによる不安得点

表2は、CLSによる死への不安の平均得点を示したものである。各学年とも「少し不安がある」から「中等度の不安がある」の範囲に得点が集まり、学年間に有意差が認められないので、本稿では標本合計の平均値のみを示した。なお今回のデータの他に、既報のデ

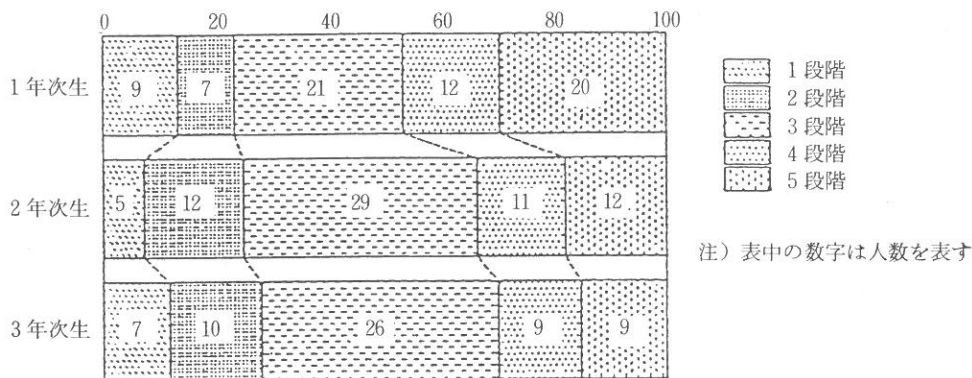


図 1 学年別 MAS 構成比

表 2 死および瀕死に対する不安 (CLS)

CLS区分	調査区分	基準値	本 学		波多野ら		
			全 体 (n=199)		既 報 (n=90)		
			平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値
自己の死への不安	54	32.90 (60.93)	6.96	34.01 (62.98)	7.30	35.40 (65.56)	7.69
他者の死への不安	60	44.60 (74.33)	5.87	44.80 (74.66)	4.81	40.72 (67.87)	5.39
自己の瀕死への不安	36	26.65 (74.03)	4.31	26.28 (73.0)	4.81	23.4 (65.0)	4.57
他者の瀕死への不安	66	41.24 (62.48)	5.16	46.52 (70.48)	5.42	42.6 (64.55)	7.58

注) () は基準値に対する平均値の割合を示す。
波多野の数値には割合を付した。

一タおよび波多野のものも示している。既報との比較では、他者の瀕死への不安についてのみ基準値に対する比率が、前回の 70.48% に対して 62.48% と少なかったが、他はほとんど変わらない。分散分析による

検定でも、本学学生の今回と既報との間の違いは、他者の瀕死への不安についてのみ認められただけである。しかし、波多野らのそれとは、すべてのカテゴリーにおいて違いを生じた。

4 終末期の患者と家族に対する援助意志

表 3 は、終末期看護における援助意志の平均値および標準偏差を示したものである。全学年の平均値は 10.8 (標準偏差 1.16) で学年による平均値の差は殆んどみられないが、標準偏差にのみ、学年が進むにつれてわずかにばらつきがみられる。このことから調査集団は、入学時より終末期の患者と家族に対する積極的な援助意志を持っていて、そのレベルは低学年も高学年も殆んど変わらないといえる。

表 3 終末期の患者と家族に対する援助意志

1 年次生 (n=69)		2 年次生 (n=69)		3 年次生 (n=61)		全体 (n=199)	
平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
10.8	1.10	10.7	1.14	10.8	1.25	10.8	1.16

IV 結 果

1 調査項目間の関連

1) 対象の個人的背景と、CLS および MAS の 13 項目間の相関を示したものが表 4-1)~4-4) で、そのクラスター分析 (Ward method) によるデンドログラムが図 2 である。

各項目間の関係の深さは、全調査対象の場合、最も高いものが「家族の死に出合った体験」と「家族の臨終に立ち合った経験」(-0.849) で、次いで「自己の死

への不安」と「自己の瀕死への不安」(0.528)、「他者の死への不安」と「自己の瀕死への不安」(0.507) と続く。第 1 位にランクされた「家族の死に出合った経験」と「家族の臨終に立ち合った経験」は、各学年とも最も高い負の相関を示しており、それは 2 年次生、1 年次生、3 年次生の順であった。「自己の死への不安」と「自己の瀕死への不安」では、3 年次生・2 年次生・1 年次生の順に高く、「他者の死への不安」と「自己の瀕死への不安」では、2 年次生・3 年次生・1 年次生の順に

死をめぐる認識と教育への展望（その1）

表4-1) 個人的背景とCLS, MASとの関係（全体）

n = 199

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1	1.000	※※ 0.318	※※ 0.528	※※ 0.367	0.071	0.104	0.098	-0.066	0.041	-0.093	0.032	0.024	-0.051
2		1.000	※※ 0.507	※※ 0.425	0.023	0.017	0.046	-0.017	0.055	※※ 0.165	0.001	※※ 0.206	※※ -0.165
3			1.000	※※ 0.492	0.070	※※ 0.227	※※ 0.142	-0.058	0.030	0.038	0.041	0.119	-0.089
4				1.000	-0.068	※※ 0.197	0.046	0.058	0.086	-0.025	0.096	0.134	※※ -0.174
5					1.000	0.168	※※ -0.034	0.094	-0.070	-0.030	※※ -0.158	0.028	※※ 0.179
6						1.000	※※ 0.159	-0.005	0.072	0.099	0.099	-0.048	0.016
7							1.000	※※ -0.849	※※ 0.209	※※ 0.182	※※ 0.246	0.067	※※ -0.153
8								1.000	-0.104	-0.115	-0.095	0.061	0.077
9									1.000	※※ 0.149	0.107	※※ 0.146	0.060
10										1.000	0.058	※※ 0.168	0.106
11											1.000	※※ 0.213	※※ -0.086
12												1.000	-0.006
13													1.000

※※ P < 0.01
※ P < 0.05

- 注) 1. 自己の死への不安
2. 他者の死への不安
3. 自己の瀕死への不安
4. 他者の瀕死への不安
5. 終末期の患者と家族に対する援助意志
6. 信仰の有無
7. 家族の死に出合った経験
8. 家族の臨終に立ちあった経験
9. 友人の死の経験
10. 自分の死を意識した経験
11. 死にゆく患者の看護についての関心
12. 死についての学習経験
13. 不安段階(MAS)

表4-2) 個人的背景とCLS, MASとの関係（1年次生）

n = 69

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1	1.000	0.136	※※ 0.452	0.099	0.016	0.045	-0.044	0.006	0.063	-0.178	0.073	0.082	0.071
2		1.000	※※ 0.478	0.217	0.177	-0.030	-0.097	0.029	-0.018	0.187	-0.125	0.125	※※ -0.257
3			1.000	0.084	0.196	※※ 0.243	0.050	-0.070	-0.107	-0.006	-0.116	0.161	0.006
4				1.000	0.038	0.141	-0.154	0.217	-0.090	※※ -0.241	※※ -0.218	-0.112	-0.135
5					1.000	0.211	-0.195	0.189	-0.190	-0.231	※※ -0.305	-0.114	0.178
6						1.000	-0.079	0.093	-0.187	-0.188	-0.040	-0.195	0.069
7							1.000	※※ -0.862	0.114	0.161	※※ 0.337	-0.021	-0.107
8								1.000	-0.163	※※ -0.276	※※ -0.254	0.056	0.015
9									1.000	0.116	0.048	0.140	-0.125
10										1.000	0.112	0.055	-0.006
11											1.000	0.183	0.033
12												1.000	-0.089
13													1.000

表4-3) 個人的背景とCLS, MASとの関係(2年次生)

n = 69

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1	1.000	※※ 0.372	※※ 0.532	※※ 0.440	0.086	-0.000	0.165	-0.159	0.061	-0.017	-0.158	0.020	-0.098
2		1.000	※※ 0.555	※※ 0.560	-0.066	0.006	0.087	-0.075	0.080	0.140	-0.011	0.188	-0.105
3			1.000	※※ 0.657	0.003	0.089	0.102	-0.079	0.068	0.087	-0.039	0.088	-0.101
4				1.000	-0.071	0.153	0.096	-0.074	0.070	0.085	-0.017	0.160	-0.267※
5					1.000	0.164	-0.073	0.067	0.020	-0.084	-0.101	0.059	0.258※
6						1.000	0.117	-0.053	0.071	※ 0.256	0.005	0.103	0.106
7							1.000	※※ -0.960	0.181	0.072	※ 0.245	0.137	-0.118
8								1.000	-0.177	-0.069	※ -0.235	-0.075	0.112
9									1.000	-0.020	0.005	0.052	0.265※
10										1.000	-0.018	0.112	0.026
11											1.000	0.016	-0.205
12												1.000	-0.122
13													1.000

表4-4) 個人的背景とCLS, MASとの関係(3年次生)

n = 61

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1	1.000	※※ 0.523	※※ 0.614	※※ 0.511	0.111	※ 0.300	0.134	-0.015	-0.003	-0.086	0.173	0.107	-0.127
2		1.000	※※ 0.524	※※ 0.461	-0.067	0.231	0.197	-0.049	0.092	0.125	0.115	0.081	-0.188
3			1.000	※※ 0.638	0.019	※※ 0.419	※ 0.316	-0.045	0.152	0.044	※ 0.299	0.183	-0.198
4				1.000	-0.150	※※ 0.395	0.155	0.050	0.217	-0.015	※※ 0.435	0.205	-0.174
5					1.000	0.145	0.156	0.018	-0.035	0.159	-0.064	0.127	0.099
6						1.000	※ 0.499	-0.034	※※ 0.428	※ 0.315	※※ 0.516	※※ 0.349	-0.114
7							1.000	※※ -0.723	※ 0.281	※ 0.290	0.220	※ 0.324	-0.235
8								1.000	0.041	-0.037	0.167	0.103	0.090
9									1.000	※ 0.268	0.247	※※ 0.350	0.076
10										1.000	0.017	※ 0.265	※ 0.252
11											1.000	※ 0.306	-0.230
12												1.000	-0.002
13													1.000

相関が高かった。これらの組み合わせは対象学年のすべてにおいて、非常に相関のあるものとして表わされていた。

次にあげられるものは、「自己の瀕死への不安」と「他者の瀕死への不安」（0.492）、「他者の死への不安」と「他者の瀕死への不安」（0.425）である。これらの相関は、2年次生、3年次生の順に高かったが、1年次生では余りはっきりしない。ちなみに1年次生で「他者の死への不安」と相関性のあったものは、前述の「自己の瀕死への不安」との組み合わせのみであり、他に「他者の瀕死への不安」と「自分の死を意識した経験」との間に5%の有意水準で相関を認めたと過ぎない。

その他の項目についてみると、①「宗教の有無」との間では、「自己の瀕死への不安」（0.227）、「他者の瀕死への不安」（0.197）および「終末期の患者と家族に対する援助意志」（0.168）が強い相関性をもっていた。

② 「自分の死を意識した経験」との関連では、「他者の死への不安」（0.165）と「家族の死に出合った経験」（0.182）に関連が高い。しかし学年別にみた場合、1・2・3年次生の間には、全く異なる結果がみられる。即ち、1年次生では「自分の死を意識した経験」は「家族の臨終に立ち合った経験」や「他者の瀕死への不安」との間で関連を示し、2年次生では「宗教の有無」の間のみ関連を表わし、また3年次生は「宗教の有無」、「家族の死に出合った経験」、「友人の死の経験」と関連をもっていた。これは自分の死を意識することが、肉親、知人の死とその臨終や宗教的な関わりなどの影響を強く受けるものであることを示している。

③ 「死にゆく患者の看護についての関心」に相関がみられるものに、「家族の死に出合った経験」（0.246）と「終末期患者と家族に対する援助意志」（-0.158）があったが、後者においては負の相関がみられた。また学年別には、「宗教の有無」「他者の瀕死への不安」などに組み合わせ上の差異がみられる。特に「家族の死に出合った経験」とに強い相関がみられたことは、家族の死の体験が終末期看護の関心の一つの動機づけとなったことを示している。また関心と援助意志の間に負の関係が表れたのは、設問上の相違によるものであり、関心が大きいと援助意志も大きくなることを示している。

④ 「死についての学習体験」は「死にゆく患者の看護についての関心」（0.213）と「他者の死への不安」（0.206）との間に強い相関をもち、「自分の死を意識した経験」（0.168）、「友人の死の経験」

（0.146）とも関連し合っている。なお、3年次生においては、前述の項目の他に「信仰の有無」（0.349）「家族の死に出合った経験」（0.324）との間にも強い関連がみられた。これらは学習体験の方法や内容の違いによると考えられ、3年次生の経験の多さを表わしている。

⑤ 全学年の「MASの不安度」と相関のある項目に「終末期患者と家族に対する援助意志」（0.179）、「他者の瀕死への不安」（-0.174）、「家族の死に出合った体験」（-0.153）がある。しかしこれらの項目の関連は学年間で違いを示した。即ち1年次生ではMASの段階と「他者の死への不安」に、2年次生では「他者の瀕死への不安」「終末期患者と家族に対する援助意志」および「友人の死の経験」に、3年次生で「自分の死を意識した経験」に関連を示した。表4-2～表4-4)にみるとおり、1年次生のMAS段階の高いもの（不安の少ないもの）は他者の死への不安は少ない。2年次生でも他者の瀕死の不安に関して同傾向を表わしている。3年次生はMAS段階の高いものは自分の死を意識した経験は少ないといえる。その他、2年次生のMAS段階の高いものは、終末期患者と家族の援助意志は強く、友人の死に出合った経験は少なかったことを示している。

2) クラスタ分析によるデンドログラム（図2）でみると、各項目は大きく4つの群にわかれる。即ち、「自己の死」「自己の瀕死」「他者の死」「他者の瀕

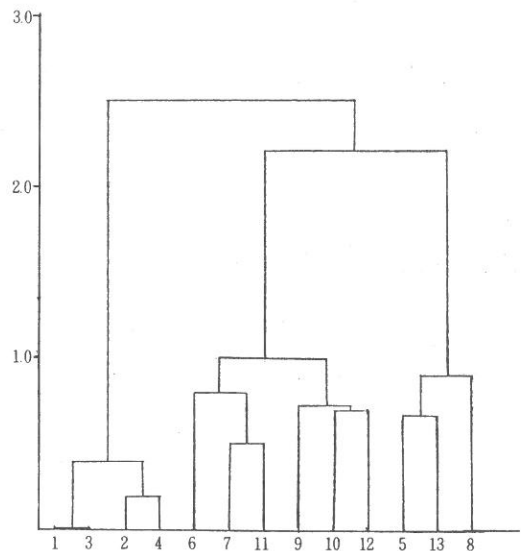


図2 MAS・CLS・終末期患者に対する援助意志等のデンドログラム

(Ward method)

死」の加わったまとまり（イ群）と、「不安段階」と「終末期患者に対する援助意志」に「家族の臨終に立ちあった経験」の加わったまとまり（ロ群）、さらに「死についての学習体験」「自分の死を意識した経験」「友人の死の経験」のまとまり（ハ群）、「家族の死に出合った経験」「死にゆく患者の看護についての関心」「宗教の有無」からなるまとまり（ニ群）を観察することが出来る。

これらの群は、一定の性格を示していると考えられる。イ群は、生体の死そのものに対する不安であり、ロ群は死に対する情緒的反応と援助意志を示し、ハ群は具体的な死の認知、ニ群はきわめて個人的な死生観に属するものといえる。そしてハ群とニ群は非常に密接な関連をもち、さらにロ群、イ群とも関連し合っていることが読みとれる。

2 主成分分析

死の不安に関する13項目の主成分分析（表5）では、第1主成分の固有値は2.60、寄与率は20%である。正の係数の変量は、 $X_3(0.48)$ 、 $X_2(0.41)$ 、 $X_4(0.41)$ 、 $X_1(0.38)$ 、 $X_7(0.30)$ などがあり、負の係数では $X_8(-0.21)$ 、 $X_{13}(-0.16)$ がある。これらより第1主成分は、“死への不安の大きさ”を表わしているといえる。

表5 MAS・CLS・終末期患者に対する援助意志・個人的背景（固有ベクトル）

	全 体				
	Z ₁	Z ₂	Z ₃	Z ₄	Z ₅
X ₁ 自己の死への不安	0.38	0.21	-0.20	0.13	-0.03
X ₂ 他者の死への不安	0.41	0.22	0.08	-0.11	-0.37
X ₃ 自己の瀕死への不安	0.48	0.23	-0.07	0.12	-0.06
X ₄ 他者の瀕死への不安	0.41	0.25	-0.04	-0.13	0.15
X ₅ 終末期の患者と家族に対する援助意志	-0.01	0.16	0.11	0.60	-0.03
X ₆ 宗教の有無	0.19	0.01	0.08	0.42	0.61
X ₇ 家族の死に出合った経験	0.30	-0.56	-0.14	0.14	-0.04
X ₈ 家族の臨終に立ちあった経験	-0.21	0.56	0.26	-0.15	0.22
X ₉ 友人の死の経験	0.15	-0.19	0.37	-0.02	0.07
X ₁₀ 自分の死を意識した経験	0.11	-0.20	0.50	0.08	-0.29
X ₁₁ 死にゆく患者の看護についての関心	0.16	-0.22	0.19	-0.31	0.55
X ₁₂ 死についての学習体験	0.17	0.01	0.53	-0.26	-0.08
X ₁₃ 不安段階(MAS)	-0.16	0.03	0.37	0.43	-0.08
固有値	2.60	1.96	1.34	1.32	1.04
寄与率	0.20	0.15	0.10	0.10	0.08
累積寄与率	0.20	0.35	0.45	0.56	0.64

第2主成分の固有値は1.96、寄与率は15%である。正の係数の変量では $X_8(0.56)$ 、負の係数では $X_7(-0.56)$ が両極端を表わしており、これより第2主成分は、“家族の死および臨終の経験”を示しているといえる。

第3主成分では、固有値は1.34、寄与率は10%であり、 $X_{12}(0.53)$ 、 $X_{10}(0.50)$ 、 $X_9(0.37)$ 、 $X_{13}(0.37)$ が正の大きい係数の変量を示しており、第3主成分は、“死についての学習体験”を示していると考えられる。

第4主成分では、固有値は1.32、寄与率は10%であった。正の係数を示す変量では、 $X_5(0.60)$ 、 $X_{13}(0.43)$ 、 $X_6(0.42)$ があり、負の係数では $X_{11}(-0.31)$ 、 $X_{12}(-0.26)$ などがあつた。これより第4の主成分は、“終末期患者への援助意志”を表わすといえる。

第5主成分は、固有値1.04、寄与率8%を占め、正の係数では、 $X_6(0.61)$ 、 $X_{11}(0.55)$ 、負の係数では $X_2(-0.37)$ 、 $X_{10}(-0.29)$ などが認められた。これより第5主成分は“宗教的・倫理的要素”を含むものと考えられる。

今回の死の不安調査の13項目のデータの分析では、5つの主成分が抽出され、累積寄与率は64%であった。

3 正準判別分析

3学年の不安調査の項目13変量に対して正準判別分析を適用し、その分析により固有値、固有ベクトルを求めると、

$$\text{固有値 } \lambda_1 = 0.5611, \lambda_2 = 0.0811$$

固有ベクトル

$$A_1 = \begin{bmatrix} -0.0236 \\ +0.0317 \\ -0.0288 \\ +0.0486 \\ +0.0838 \\ -0.4869 \\ -0.7377 \\ -0.2447 \\ -0.1782 \\ +0.0941 \\ +0.7450 \\ +1.9776 \\ +0.2131 \end{bmatrix} \quad A_2 = \begin{bmatrix} +0.0434 \\ +0.0570 \\ -0.1699 \\ +0.0311 \\ -0.0778 \\ -0.6418 \\ +2.8057 \\ +0.9706 \\ +0.5383 \\ +0.2601 \\ -0.8650 \\ -0.2572 \\ +0.1725 \end{bmatrix}$$

第1正準変量 $\lambda_1 = -0.0236X_1 + 0.0317X_2 + \dots + 0.2131X_{13}$

第2正準変量 $\lambda_2 = +0.0434X_1 + 0.0570X_2 + \dots + 0.1725X_{13}$

となる。

このような2つの正準変量を用いると、3学年間の差がもっともよく表現出来る。これらの正準変量の値を各個体について計算し、散布図に描いたものが図3である。第1・第2正準変量の散布図には、1年次生群と3年次生群はⅡ軸に対して左右対称形をとり、1年次生はⅠ軸の正の領域に、3年次生は負の領域に集中した。

そこで、1年次生と3年次生との差異を、学年別に表わした13項目の各々の平均値でみると(表6参照)、**①**CLSの不安得点は、1年次生が最高で、3年次生が最低となっている。CLSの項目間に著しい不安得点のバラツキを表わしているのが1年次生である。**②**死についての学習は、1年次生に比べて3年次生の方が多く、1・2・3学年間にダンカンのマルチプルテストによる1%の有意差を認めた。**③**自分の死を意識した経験は、3年次生に多いなどが明らかにされた。

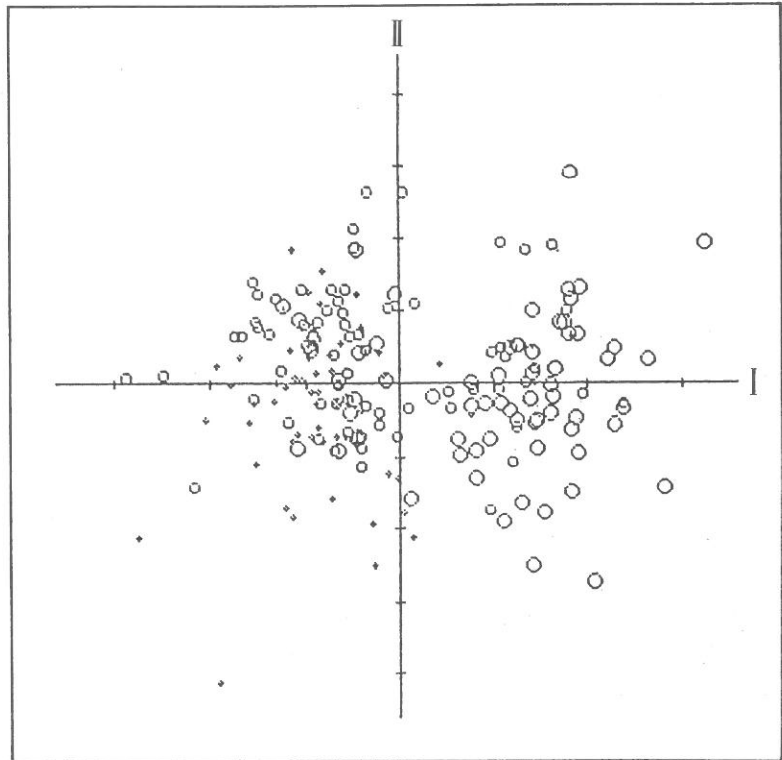


図3 第1, 2正準変量の散布図

表6 項目別平均値および標準偏差値

学 年	項 目	項目												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
全 学 年 n = 199	平 均 値	32.9	44.6	26.6	41.2	10.8	1.7	1.4	1.0	1.7	1.5	1.08	1.3	3.2
	標 準 偏 差	6.96	5.87	4.31	5.16	1.16	0.51	0.51	0.95	0.55	0.56	0.31	0.44	1.23
1 n = 69	平 均 値	32.4	45.8	26.8	42.0	10.8	1.7	1.3	1.2	1.7	1.6	1.1	1.7	3.4
	標 準 偏 差	6.46	6.29	4.07	4.13	1.10	0.54	0.47	0.94	0.54	0.50	0.35	0.46	1.35
2 n = 69	平 均 値	33.3	44.5	26.2	41.1	10.7	1.7	1.5	0.9	1.7	1.5	1.1	1.3	3.2
	標 準 偏 差	7.14	5.98	4.56	5.43	1.14	0.53	0.50	0.96	0.50	0.50	0.24	0.51	1.14
3 n = 61	平 均 値	33.1	43.3	26.9	40.6	10.8	1.9	1.4	1.0	1.6	1.4	1.0	1.0	3.0
	標 準 偏 差	7.28	5.22	4.28	5.83	1.25	0.44	0.55	0.94	0.62	0.67	0.31	0.34	1.18

- 注) 1. 自己の死への不安
 2. 他者の死への不安
 3. 自己の瀕死への不安
 4. 他者の瀕死への不安
 5. 終末期の患者と家族に対する援助意志
 6. 信仰の有無
 7. 家族の死に出合った経験
 8. 家族の臨終に立ちあった経験
 9. 友人の死の経験
 10. 自分の死を意識した経験
 11. 死にゆく患者の看護についての関心
 12. 死についての学習経験
 13. 不安段階(MAS)

要 約

短大看護学生 289 名について、終末期看護に影響すると思われる調査を行ない、解析した結果は以下のようである。

- 1 対象全体の特性としては、調査7項目中、瀕死者への看護の関心が最も高く、次いで学習体験であった。1年次生では学習体験の少なさが有意であった。
- 2 学年別のMAS構成比は、高不安度を示すものが約1割であった。なお2年次生、3年次生の分布は極めて近似していた。
- 3 本学学生の、患者と家族に対する援助意志は極めて高い。(平均値 10.8 ± 標準偏差 1.16)
- 4 死の不安に関する各調査項目間では、「家族の死の経験」と「臨終に立ち合った経験」の間に最も高い

相関が認められ、個人の死に対する不安項目相互間にも有意の関係がみられた。また死に対する関心が、過去の経験や学習と強い関係を持つことも証明された。

- 5 クラスタ分析から、死に関する四つの群を見出した。それぞれを生体の死に対する不安、死に対する情緒的反応と援助意志、具体的な死の認知、死生観と命名できる。
- 6 主成分分析から、死への不安、家族の死および臨終の経験、学習体験、援助意志、宗教的(倫理的)要素の5つの成分を抽出した。
- 7 正準判別分析から、3学年間に有意の分布が観察された。CLS不安得点は1年次生が最高であり、死についての学習では1・2・3学年間に有意の差を認めた。

参 考 文 献 ・ 引 用 文 献

- 1) 藤原幸江, 他: 看護学生の終末期看護に対する援助認識および援助行動傾向とMAS(顕在性不安尺度)との関係, 看護展望, 12, 9, (1987)
- 2) 波多野梗子, 他: 看護学生の終末期患者への援助的認識と看護行動傾向の学年による差異, 看護研究, 14, 1, (1981)
- 3) 波多野梗子, 他: 終末期患者に対する看護学生の援助認識・援助行動傾向への関連要因, 看護研究, 15, 4, (1982)
- 4) 遠藤千恵子, 他: 看護教育における患者の死に関する研究, 神奈川県立衛生短期大学紀要, (1971)
- 5) 西村由紀子, 他: 看護学生の死に対する認識について; 学習段階別差異, 第14回看護教育学会, (1983)
- 6) 村田恵子, 他: 看護学生の死および瀕死の患者に対する態度と援助認識・行動傾向の発達的变化, 看護教育, 24, 7, (1983)
- 7) 小島操子, 他: 死・死の看護; 教育の現状と課題, 看護, 37, 7, (1985)
- 8) 古城幸子, 他: 看護学生の終末期患者への援助傾向, 第17回看護教育学会, (1985)
- 9) 2)に同じ
- 10) 岡堂哲雄編: 心理検査学, 垣内出版, (1975)
- 11) Taylor, T.A, 他, 高石昇: 顕在性不安検査使用手引書, 三京房, (1968)
- 12) 田中豊, 釜水共之, 脇本和昌: パソコン統計解析ハンドブックII, 多変量解析編, 共立出版, (1984)

昭和63年3月31日受理